

「主よ 私に答えてください」

(詩篇13・1～6)

一、「ダビデ」の嘆き

(※ 作者をダビデとして読んだため、「ダビデ」と表記しました。)

1節をご覧ください。主よ、いつまでもですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで 御顔を私からお隠しになるのですか。と「ダビデ」は主に嘆き訴えています。皆様はここを読んで、どのように思われるでしょうか。「ダビデ」は主に信頼していませんか。ですが、所詮人間とは、悩み、傷つき、嘆いてしまうような存在です。もし親から「人前では涙を見せるな」と言われて育ち、あるいは教会で「信者に悩みはない」と教えられて信仰生活を送るとします。そうしますと、涙を見せられない人間になってしまいます。あるいは、悩まない信仰者、すなわち悩むことが不信仰であると受け止めてしまう信仰者になってしまいます。「ダビデ」の嘆きは何だったのでしょうか。2節をご覧ください。主よ、いつまでも、私には自分のおかしいのうちに、思い悩まなければならぬのでしょうか。私の心には一日中悲しみがありません。いつまでも敵が私の上におり高まるのですか。

と嘆き訴えています。具体的に何を「ダビデ」が嘆き訴えていたのかは分かりません。これまでの詩篇のことばから類推するなり、例えば10篇にありますように、主よ、4悪しき者は高慢を顔に表し、神を求めません。「神はいない。」これが彼の思いのすべてです。という、おごり高まる者が跋扈していた状況が考えられます。その続きですが、主よ、5と6彼の道はいつも栄え、あなたのさばきは高すぎて、彼の目に入りません。敵という敵を、彼は吹き飛ばしてしまいます。彼は心の中で言っています。「私は揺るがされることなく代々にわたって、わざわいにあわなない。」とこの状況が考えられます。13篇には、「ダビデ」の祈りに主が答えられた、ということばはありません。むしろ、悩み嘆く中で、「ダビデ」の思いが、神が「よし」とされる祈りに近づいて行っているように思われます。

二、「ダビデ」の嘆願

3節、4節をご覧ください。主よ、私の目を注ぎ、私に答えてください。私の神が死の眠りにつかないように。「彼に勝った」と、私の敵が言わないように。私がぐらつくことを、逆らう者が喜ばないように。とあります。主よ、私の神、この近い関係を表すことばです。神との近い関係を表すことばです。

す。それほどまでに、13篇の作者は神と近い関係にありました。そういう意味でも、作者をダビデと受け止めますと、しっくり来ます。また、私の目を明るくしてください。とは、どういう意味なのでしょう。同じ表現が、詩篇19篇にあります。皆様もよくご存じの聖句です。主よ、8主の戒めは真直ぐで、人の心を喜ばせ、主の仰せは清らか。人の目を明るくする。と。あるいは、このいう聖句も詩篇にあります。主よ、119と130(新改3)みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。と。旧約で「主の戒め」「主の仰せ」「みことば」と表現されているのは、律法(トラー)のことです。旧約の時代は、律法を通して、神の霊である御霊が働かれました。詩人は、御霊によって目が明るくされ、神の働きがはっきり見えるようになりました。

三、「ダビデ」の告白

続いて、5節、6節を見てまいります。主よ、私はあなたの恵みに抛り頼みます。私の心はあなたの救いを喜びます。私は主に歌を歌います。主が私に良くしてくださいましたから。と告白しています。その前の節である4節をご覧ください。主よ、彼に勝った」と、私の敵が言わないように。私がぐらつくことを、逆らう者が喜ばないように。と語って

います。このギャップをどのように受け止めたら良いのでしょうか。おそらく皆様は何の抵抗もなく、受け止められると思います。神を信じていますと、神とつながるといふ経験をされるからです。現実には少しも変わっていないにもかかわらず、目に飛び込んでくる世界が変わります。それは、神の恵みのわざです。そういうわけで、本当の敵とは、私共を混乱に陥れようとしているように見える出来事、ないしは人ではありません。「神は忘れておられる」「神は顧みられない」「今のままでかまわない」と考えてしまうことです。ですが、神は介入されます。そして、神が私たちと共に知られると知ることになります。5節に、主よ、私はあなたの恵みに抛り頼みます。とあります。新共同訳は、あなたの慈しみに依り頼みます。と。「恵み」ないしは「慈しみ」と訳された元のことばは「ヘセド」で、神の側からなされる恵みの行為です。13篇が物語ることは、まず神の前に正直に嘆き訴えることです。そして、願い求めます。そして、神が近づいて来られ、触れられます。そして、現実には変わらぬものの、目に見える世界が一変します。そこに神のわざを見ます。

私たちは、主の前に大いに嘆き訴え、願い求め、御霊によってみこころになった告白に導かれようではありませんか。